

2010/04/30

報 告 書

千葉大学非常勤講師

福間 加容

研究テーマ : ロシア象徴主義美術からアヴァンギャルドへ
—普遍的芸術創造のための美学—

ロシアの未来派またはロシア・アヴァンギャルド美術はやその前段階の芸術流派も含めて、ロシア象徴主義美術とは異なる造形言語に基づいたまったく異なる芸術だとされ、その間には大きな断絶があると考えられている。これに対し本研究は、象徴主義新世代から未来派に至るまでの哲学思想を調査し、洋の東西を統合する「普遍的芸術」への志向が象徴主義の思想から生まれ、アヴァンギャルド美術の思想へ受け継がれていったことを示し、その過程の再構成を試みることを目的とする。

今回の調査（2009年11月と12月）では特に19世紀後半の女子教育に関する研究、農民芸術に関する研究、当時の万博に関する資料の収集に努めた（なお、12月20日（日）に、ロシア象徴主義思想と密接な関係がある世紀転換期の神秘主義思想をテーマに掲げた「地域大国の文化的求心力と遠心力」2009年度第2回研究会「ユーラシア地域大国の神秘主義をめぐって」に参加）。なぜなら、ロシアの美術が「普遍的芸術」の創造を担う使命を持つと自他共に認められるためには、「西」であるヨーロッパに対する自らの「東」の部分、すなわちヨーロッパ文明に侵されていないロシア独自の優れた伝統的文化の存在が必要であり、農民芸術の再発見はまさにこの要求に合致していたと思われるからである。興味深いことに、農民芸術の再発見は1867年の農奴解放令発令後、困窮する農民と地方経済振興のため、ツァーリ政府主導の公的政策により行われていた。また農村の振興策の一環として、農民の教育、女子の教育に力が入れられた。移動展派の批評家ウラジーミル・スターソフ（1824-1906）も、農民芸術の復興に一役かっており、論文「ロシアの民族的装飾」（1872）でロシア各地からさまざまな紋様を多数収集し詳しく解説を加えていた。十九世紀から二十世紀初頭に催された万国博覧会のロシアのパビリオンは、これらの農民芸術の装飾方式で設計されていた。世界に向けて自国の卓越性を披露する場である万博に、ロシア政府はアカデミックなスタイルによる自国の歴史を主題にした歴史画、風俗画を出展すると同時に、農民芸術の品々も別の会場で出展していた。農民芸術は政治的にも思想的にも「ナロードノスチ」の問題に深く関わっていたと思われる。そして農民芸術の再発見はロシア美術の卓越性に関する美学的根拠の一つになった可能性がある。

農民芸術からアプローチすることにより、ロシア・アヴァンギャルドの美術は「普遍的

芸術」の創造という点において、断絶しているとされてきた象徴主義、加えて移動展派との連続性が指摘できる可能性が期待される。本研究の一部分は論文「帝政ロシア時代におけるマトリョーシカの創造 ―ナショナリズムとジェンダーの身体―」として 2010 年 7 月に出版予定である論集「着衣する身体」（出版社未定）に収録される予定である。